

# MALAWI

岡山県立岡山聾学校 担当教科：英語・数学・体育・自立活動 大江 俊彦

●実践教科：英語 ●時間数：5時間 ●対象学年：高等部1～3年生 ●対象人数：20名

## 実践の目的

- ・空港での搭乗表示板など、異文化での情報を視覚的に把握する力を育てる。
- ・マイノリティー文化であるという点からマラウイのチェワ語と日本の手話に目を向け、その意義を考える。
- ・マラウイと日本の共通点・相違点に目を向け、様々な角度から物事を考える力を育てる。
- ・ピアサポート（peer support：同年代の友だちが友だちをサポートする「生徒指導資料集教育相談編No.3」より・この他、同年代に限定しない考え方もある。）やコミュニケーションの大切さについて考える。

## 授業の構成

| 時<br>限 | テーマ・ねらい                                                                              | 方 法 ・ 内 容                                                                                                         | 使 用 教 材                          |
|--------|--------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------|
| 0      | われわれの生活観<br>・自分の生活と生活観を言葉にして確認する<br>・マラウイの生活と生活観について想像してみる                           | ・生徒の生活と生活観についてアンケートを作成、実施する<br>・アンケートは日本語・英語併記で、同様のアンケートをマラウイでも実施<br>・マラウイの高校生にしてみたい質問を各自で考える                     | 事前アンケート（資料なし）                    |
| 1      | DEPARTURE<br>・異文化・異言語の視覚情報を処理する                                                      | ・関西空港からリロングエ空港までの移動の中で目にした情報を見せ、異文化情報を視覚から読み取る                                                                    | パワーポイント<br>ビデオ<br>機内誌            |
| 2      | FOOD<br>・食材の入手や調理法の相違が食に対する意識にどう影響しているかを考える                                          | ・教材からマラウイの食文化を材料・調理法・メニューについて分析し、日本の食生活との比較から、どのような相違があるか考える<br>・食生活について生徒各自の実態が把握しやすいよう、いくつかの選択肢から選ばせる           | パワーポイント<br>ビデオ                   |
| 3      | NATURE<br>・マラウイの自然を鑑賞し、自然と人間の関係を考える                                                  | ・教材からリロングエ野生センター、マラウイ湖、バオバブ、ムランジェ山保護協会などを紹介し、それを保存するための取り組みについて学ぶ                                                 | パワーポイント<br>ビデオ<br>機関誌<br>マランベジャム |
| 4      | SCHOOL<br>・マラウイの教育環境と生徒の素顔に触れながら、学校生活を比較し、学ぶことの意義について考える<br>・言語を文化として捉え、手話の豊かさを再認識する | ・マラウイには教育環境として未整備のものが多くある一方、手造り校舎などの暖かい環境もあることを確認し、学ぶことの尊さを再考する<br>・（独自の）文字を持たないチェワ語と手話について、その意義を英語や日本語との対比の中で考える | パワーポイント<br>マラウイ生徒の創った紙芝居         |

|   |                                                                                                  |                                                                                                                                                                                                                                  |                           |
|---|--------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------|
| 5 | <b>LIFE</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・障害を有することについて、人生を充実させるということについて考える</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・青年海外協力隊員が企画するエイズのピアサポートグループの活動を紹介し、仲間で活動を共にすることの意義について話し合う</li> <li>・マンガチの日常を描いたアクリル画から、村の生活の中に窺われるコミュニケーションの濃密さについて話し合う</li> <li>・日本とマラウイ双方のアンケート結果を比較し、相互の意識の差異と共通点について話し合う</li> </ul> | パワーポイント<br>民芸品<br>回収アンケート |
|---|--------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------|

## ● 授業の詳細

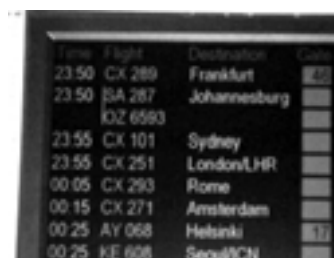
# 1 限目 | DEPARTURE

音声案内が外国語だと聴覚障害のハンディ差は縮まる。視覚情報を冷静に処理することで海外旅行を安全なものにするよう、クイズで楽しみながら学習する。

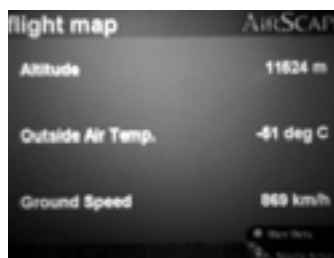
### 【教材の内容】

香港国際空港で見られた案内①

南ア航空機内、座席背面のタッチモニター画面②



①絵での表示は世界標準的。フライト情報は中国語と英語で入れ替わる



②長距離飛行をサポートする情報やサービス満載の座席モニター画面

### 〈所 感〉

情報が世界標準的に図示されていること、中国語では全く読みとれない情報でも知っている英単語とローマ字読みのカタカナ外来語を頼りに大まかな判断ができることがわかり、生徒は安心したようだった。

## 2 限目 FOOD

マラウイの食文化を見て、食について再考する。

### ①料理はどの程度手伝う？

料理を作る人についてどう思う？

嫌いな食べ物が出るとどうする？

食べ物を残すこと、捨てることに罪悪感はない？

「いただきます」は誰に対して言う？

### ③挽きたてのメイズには格別の風味があるが、挽くのにかかる時間は2時間。

メイズ(トウモロコシ)は  
何時間もひいて粉にする。



茶碗(ちやわん)  
1杯(ばい)分に  
2時間かかるそう  
だ。

## 3 限目 NATURE

本校は県内唯一の聾学校であり、広範から通学する生徒の生活環境は異なるものの、今日的な環境問題、エコロジーは共通の話題である。今年は、国際生物多様性年(IYB: International Year of Biodiversity)に当たり、大自然と人間との関わりについて学習する。

空港では動物の毛皮が土産物として売られている。その一方、野生センターは、乱獲から動物を守り、種を保存するため、極力野生に近い環境を整えた広大な動物園である(写真①、②)。動物については病気の感染源になりうるという問題もあり、野生センター掲示板にあった子どもが描いたポスターには「道路わきで売っている動物を買わないで! 狂犬病のおそれがあるよ」(写真③)と書かれている。

植物の保全についてもムランジェ山での積極的植樹と作物の収穫指導が青年海外協力隊員の協力を得て行われている。そこでしか生息しない希少動物を保護する活動もなされている。



①野生センター看板



②保護される動物



③狂犬病注意ポスター



バオバブ



マラウイ湖(チャンボ漁)



ホテルのメニュー



ムランジェ山



自然保護協会

### 〈生徒の反応および所感〉

野生センターの画像を紹介していると、「この写真のワニと遭遇したのか」といった質問を何度も受けた。実は私にも研修前同様の心配があった。野生の猛獣はアフリカのどこにでもいるような印象が依然根強いようだ。

ムランジェ山では希少動物の保護と共に、植物の保全、植樹、作物の収穫指導を、青年海外協力隊員の支援を得ながら行っている。国際生物多様性の集大成年であることと合わせ、生物に関するこのような取り組みは組織化され、長年にわたる努力なくしては実現されないものであるこ

とを伝える。

WFP（国連世界食糧計画）の飢餓撲滅親善大使を務めたケニアのマラソンランナー、ポール・テルガト氏について教科書で学んでいた2年生は、ムランジェ山のロッジで偶然出会ったWFPのボランティアとその車両に関心を寄せた。生徒に教科書で学んだ知識を現実のものとして感じられるような瞬間を与えることができてよかった。

## 4 限目 | SCHOOL

マラウイでは教科書が貸与され、しかも数人の共用であったり、教室・机・イス等不足する施設設備が多くある。一方、卒業生や保護者の手造り校舎など、温かい面もあるといえる。

現在、我々が抱く学校のイメージの中にはパソコンをはじめとする視聴覚機器が当たり前のようになり、修理すれば使えるものまで新機種に代替されている。機器は可能な教育活動を加速度的に増やす一方で、本来の学習目的や意義を見えにくくしているかもしれない。与えられる教材や設備を当然のものと思ったり、学校に通い学ぶという立場や意義そのものが軽視されたりする風潮も今の日本にないとはいえない。不足するものを有形無形に補いながら学ぶマラウイの姿勢に、学び本来の姿を考えさせたい。

また、チェワ語が独自の文字をもたないのは手話と似ている。気持ちを即興で表現するアフリカンダンスも手話と似ているとは言えないだろうか。

手話は逐語訳のできないトータルコミュニケーションであると考え。手話自体が豊かなものであることを生徒と一緒に考える。

①青年海外協力隊員の赴任校ンサマナ中等学校に機器設備は一切ないが、授業参加には積極的で、その様子をうかがう弟妹の姿が窓の外に見える。



授業の積極参加



弟妹の姿が見える



テストで合格点をもらい喜ぶ

②地域の人による新校舎建設



レンガ作りから全て手造りの校舎

### ③チンゴンベ中等学校での交流授業



持参した手作り紙芝居



マラウイの昔話を紙芝居にする活動



来訪者来校の喜びをダンスで表現

#### 〈生徒の反応および所感〉

生物の授業で青年海外協力隊員が使う教材といえ、模造紙大の紙にマジックで描いた消化管の図のみ。理科系が専門の青年海外協力隊員が堂々と英語で授業をしている様子に生徒は感銘を受けた様子だった。英語が目的でなくコミュニケーション手段として使われている場面を生徒は全く予測していなかったらしい。

本校生徒にとって、音声表記言語である英語は表意文字（漢字）を使う日本語よりも数倍難しい言語である。授業がチェワ語で行われるのは小学校までだ。「日本では授業は何語で行われるのか」というマラウイ生徒の質問に「日本語」と答えたと驚いていた、とイギリスに支配された時代を過去に持つマラウイの歴史を生徒に伝える。

チンゴンベでの交流授業では持参した紙芝居「かさじぞう」と「ももたろう」を見本に、紙芝居を創る活動をした。アニメのイラストを描く本校生徒にとって、マラウイの生徒の絵が完全オリジナルの画風であることに新鮮な驚きを覚えたようであった。また画用紙の裏に綴られたきれいな英語を見て、最貧国の生徒が英語を書けることに感心していた。公用語である英語教育を受けたマラウイ国民のほとんどがかなりのレベルの英語が話せることを知ると「国際化時代に幸運である」という見方をした。

「チェワ語は独自の文字を持たず英語のアルファベットを借りて発音表記する言語で、公用語の英語に押されて廃れてしまう可能性がないとは言えない。手話もマイノリティーの言語だが、日本語に押されてしまったらどんな不都合が起こるか」と尋ねてみると、「書く手間が必要になる」、「書かなければ伝わらなくなるから困る」という答えが返ってきた（特に日本手話でなく、日本語対応手話）。

チンゴンベの交流授業で伝えた「言葉は、それを使う人たちが培ってきた文化に他ならない。だから大切にしなければいけない。」と同様のメッセージを本校生徒にも伝えた。手話によって継承される豊かな文化に生徒が誇りを持つための条件が何かは、聴者も考えなくてはならない問題だ。



マラウイの生徒が作った紙芝居



ムランジェでは、病にかかった方たちが積極的にサポートグループに参加する姿を見せていた。

ピアサポートによりそこに発生した、パワフルで前向きなエネルギーを生徒に伝えることを目的とした。

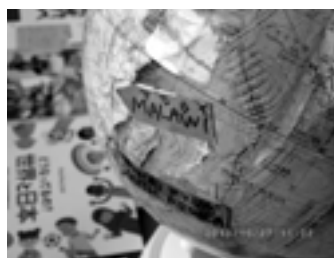


## 〈生徒の反応および所感〉

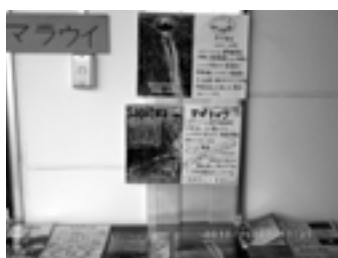
日本ではHIV感染者の身体障害者認定（厚生労働省HP平成9年12月16日HIV感染者の身体障害者認定について）が、マラウイでは認定されないという。障害者とそうでない者を分けるのは尺度なのか環境なのか。“temporary enabled（暫定的健常者）”という表現がある。障害を持たない者が障害と無縁であるのは暫定的で、いつの日か必ず事故や病気、老化から、多かれ少なかれわれわれは皆障害を有することになるということをこの言葉は表している。また、障害の有無を問題にする限り、永遠に解決には至らないような気もする。聴覚障害はコミュニケーションの障害と言われ、目に見えにくいという点でなかなか理解が得られないことがある。あるいは全ての障害の生きにくさという点を問題にするならば、支援とは相手の立場に思いを及ばせようとする姿勢に集約されるかも知れない。心の痛みを分かち合い相互に扶助するピアサポートの考え方を伝えるべき対象は生徒のみならず普遍的であるということ、さらに特別支援学校に勤める自分は障害者と“temporary enabled（暫定的健常者）”間のパイプ役を果たす絶好の立場にいるという思いを強くした。

## 全体を通しての成果と課題

マラウイでの私の2週間は未だ整理しきれていないが、生徒には2週間の読書週間に合わせ、持ち帰った本や雑誌、新聞、JICA発行冊子を紹介した。1万キロメートル旅した本を手に取り、小・中・高等部の児童生徒が目を通して様子を見て、視覚的・具体的な形で海外を紹介できたことを嬉しく思う。これが地球や海外の現状について関心を持つ機会になり、自分と異なる境遇の人の立場に立ち考える姿勢を持つ契機になってくれればと思う。



世界には名前も知らない国が多くあることに気づく



マラウイの本、雑誌



南アメリカ航空の機内誌



MANGA

## 参考資料

### 【インターネット】

- ・「国際生物多様性年（IYB：International Year of Biodiversity）HP」 [www.cbd.int/2010](http://www.cbd.int/2010)
- ・「WFP（国連世界食糧計画）HP」 [www.wfp.or.jp](http://www.wfp.or.jp)
- ・「厚生労働省HP」 <http://www.mhlw.go.jp/hondou/0912/h1216-1.html>

## 参加者氏名

(五十音順)

|     |                                                |                                         |
|-----|------------------------------------------------|-----------------------------------------|
| 鳥取県 | くらよしりつさいごうしょうがっこう<br>倉吉市立西郷小学校                 | あき た ひろふみ<br>秋田 博文                      |
| 広島県 | み よし りつかわちちゅうがっこう<br>三次市立川地中学校                 | いしはま もり お<br>石濱 守央                      |
| 岡山県 | おかやまけんりつおかやまろうがっこう<br>岡山県立岡山聾学校                | おお え としひこ<br>大江 俊彦                      |
| 広島県 | ひろしまけんりつだいもんこうとうがっこう<br>広島県立大門高等学校             | か がわ<br>香川ゆかり                           |
| 広島県 | くれたけ だ がくえん たけだちゅうがくこうとうがっこう<br>呉武田学園 武田中学高等学校 | サウザー アシュリ ロジャー<br>Souther, Ashley Roger |
| 広島県 | み はらしりつにししょうがっこう<br>三原市立西小学校                   | た なか りょうこ<br>田中 涼子                      |
| 岡山県 | かがみのちょうりつかみさいばらちゅうがっこう<br>鏡野町立上齋原中学校           | まつ お まり こ<br>松尾真理子                      |
| 山口県 | ほうふしりつむこうしましょうがっこう<br>防府市立向島小学校                | やまもと すなお<br>山本 直                        |

## 海外研修同行者より

今回の研修では、中国5県の教育現場で活躍されている8人の先生たちが、初めてアフリカを旅しました。皆、今回の研修を通じて知り合った仲間です。

行き先は、「The Warm Heart of Africa〜アフリカの暖かき心〜」と呼ばれ、とても穏やかな心を持つ国民性で知られるマラウイ共和国です。

そこでは、日本なら助かる命が消えゆく医療現場、90人の生徒が学んでいる机のない教室、そして、マラウイ人と同じ言葉を使い、同じ目線で活動する青年海外協力隊員の働く様子を目にしました。また、HIV陽性者同士が助け合って生きていく姿や、いつも笑顔で「ジコモ！（ありがとう）」と言ってくれるマラウイ人も忘れられないものとなりました。

マラウイ滞在中、毎晩振り返りの時間を設け、視察先での疑問点や心に響いたことを話し合い、自身以外の価値観を共有する良い機会を持ちました。

これまで「靴がない、モノがない」＝「貧しい、可哀想」と考えていたことが、実は、マラウイでは「裸足であることが心地よい」と感じられている、あるいはモノはなくても、工夫しながら作り出す知恵」を持っていることに気付き、日本とは異なった見方を発見するきっかけとなりました。

日本とは違って経済的に豊かとは言えないマラウイの生活の中で、日本では失いつつある「人と人との強い絆で繋がっている」様子を目の辺りにして、「豊かさとは何か」を考えさせられる15日間となりました。

帰国後、先生たちは、マラウイで「見て・触って・匂って・心で感じた」ことを学校現場で広く紹介しています。一人でも多くの日本の生徒たちが世界とのつながりを意識しながら生活してほしいと願ってやみません。